

被災地 修学旅行 復調の兆し

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の影響で、2011年度は激減した福島県会津地方や宮城県松島への修学旅行が、ことは回復の兆しを見せている。会津若松市では宮城から訪れる学校が11年度に比べて倍増。松島の観光関係者も復調の手応えを感じつつある。修学旅行先の「定番」だった地に、わずかな光明が差し込んでいる。

会津若松 「宮城から」倍増 松島 関係者「手応え」

会津若松観光物産協会によると、震災前の10年度は県の修学旅行は、県外から訪れたが、11年度は100校と激減し、10年度の12%にとどまった。特に最多の約4割超を占めていた宮城県からの減少は深刻で、10年度には358校だったが、11年度は59校に落ち込んだ。宮城県内の小学校の8割超は会津若松市を訪れる「常連」だっただけに、会津の関係者は危機感を強めた。



観光客でにぎわう会津若松市の鶴ヶ城。修学旅行にも回復の兆しが出てきた

焦点 東日本大震災

会津若松市と観光関係者らがつくる「会津若松市教育旅行プロジェクト協議会」は昨年11月からことし1月、宮城県内の小学校420校を訪問。市内の空間放射線量や余震のデータを丁寧に説明し、福島第一原発からの距離は仙台とほぼ同じ約100キロなど訴え、安全性をアピールした。地道な努力が奏功し、本年度は宮城から100校の修学旅行が確定。県外からの総計も、200校に回復する見通しだ。さらに宮城では、72校が「会津若松ほかの地域かを検討中」という。プロジェクト協議会は災害にも備え、修学旅行向けの避難所一覧や連絡先をまとめた「安心マップ」も作成した。

伊藤国雄専務理事は「私も6月に岩手、山形の3校の児童に被災当時の話をする」と話す。被災地への修学旅行を社会教育の場として活用したいと考える学校関係者は多いという。ただ、11年度の修学旅行生が入場が10年度の約1割に落ち込んだ「みちのく伊達政宗歴史館」の奥山完爾常務は「修学旅行がすぐに松島に戻るのには難しいだろうとみる。東北以外の遠隔地からの修学旅行は、依然厳しい。新潟を含む東北7県の官民でつくる東北観光推進機構国内事業部の坂本文男部長は「九州や関西など東北から遠い地域ほど慎重だ。現地でのセミナーなどを通じて、粘り強く理解を求めていくしかない」と話している。

34面に関連記事

修学旅行「会津回帰」

焦点

東日本大震災

教育効果の良さ 充実した受け入れ態勢

高評価で呼び戻す

東京電力福島第一原発事故を受け、福島県会津地方への修学旅行を見合わせていた宮城県内の小学校にも「会津回帰」の動きが出てきた。教育効果の高さや受け入れ態勢の充実ぶりなど、修学旅行先としての評価が高いことが背景にある。ただ原発事故の影響を不安視する保護者の声は根強く、震災前の水準に戻るには、まだ時間がかかりそうだ。

行き慣れた場所

仙台市国見小は昨年、6年生の修学旅行の行き先を山形県に変更したが、ことしは会津地方に戻す。神父良夫校長は「会津は児童同士の自主研修や体験活動の場が充実している。街全体に受け入れ態勢が整っており、安心して過ごせる」と説明する。

岩手県から会津に戻す大崎市三本木小は「行き慣れた地なので、教師にも経験の蓄積がある」と理由を話す。同じく2年ぶりに会津地方に出掛ける巨理町長瀬小の渡辺清孝教頭は「会津を学ぶ狙いや安全性など総合的に判断した」と説明する。仙台市教委のまとめで

保護者の不安 解消が課題



昨年の修学旅行シーズンは空きが目立った観光地の駐車場。ことしは会津への修学旅行がやや回復しそうだ＝会津若松市の鶴ヶ城会館

は、会津地方の修学旅行に比べれば約2割にとどまを予定しているのは12.5%。

懇談会開き説明

5校のうち23校。わずかに4校だった昨年から大幅に増加したとはいえ、震災前の10年度(106校)活

1面に関連記事

るのは保護者の理解だ。仙台市国見小は2月に保護者懇談会を開催。仙台市と会津若松市で2日間過した場合、年間の追加被ばく線量に大きな差がないことを伝え、理解を求めた。

昨年引き続き会津地方を選んだ仙台市高砂小は、滞在中に提供される食材の産地を事前に確認する。災害に備えて飲料水や非常食もバスに積み込む予定で、菊地秀敏校長は「安全安心のためできる限りのことをする」と強調する。

一方、昨年に続き、米沢市方面を選んだ石巻市中里小は「保護者に放射線の影響を不安視する声があった。米沢の方がより理解を得やすいと判断した」と説明する。

会津若松観光物産協会の渋谷民男統括本部長は「修学旅行先は学校や旅行代理店だけでは決められない」と、早期回復の難しさも感じている。